二二六二番

秋萩を　散らす長雨の　降る頃は　ひとり置き居て　恋ふる夜そ多き

二二六三番

九月の　しぐれの雨の　山霧の　いぶせき我が胸　誰を見ば止まむ

二二六四番

こほろぎの　待ち喜ぶる　秋の夜を　寝る験なし　枕と我は